

和語（ひらがな）が啓く「ほとけ」の世界

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-12-12 キーワード (Ja): キーワード (En): Hiragana, hotoke, Michizou Noguchi, hodoke, toke 作成者: 原山, 建郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/333

The World of Hotoke (Buddha) as Revealed by the Native Japanese (Hiragana) Words

HARAYAMA Tatsuro

Key words

Hiragana/hotoke/Michizou Noguchi/hodoke/toke

Summary

In the middle of the 6th century, the term “Buddha” was transmitted to Japan from China by way of the Korean Peninsula. This article will first show how the term “Buddha” was not only pronounced according to Chinese sound but also according to indigenous Japanese sound. The indigenous pantheistic Japanese religious environment was able to adopt the foreign Buddhist religion with relative ease. I will argue that one of the reasons for this is attributable to the Japanese pronunciation of the term Buddha (the Awakened One) as “ho-to-ke” enabled the creation of a Buddhist paradigm that was acceptable to the host Japanese culture. I will also discuss the relationship between the Buddhist teachings of salvation and the mental impact of other Japanese words, such as “toku/tokeru,” “hodoku/hodokeru” and “yurusu/yurumu.”

和語(ひらがな)が啓く「ほとけ」の世界

原 山 建 郎

和語（ひらがな）が啓く「ほとけ」の世界

原 山 建 郎

〈キーワード〉 ひらがな 仏（ブツ）と仏（ほとけ） 野口三千三 素語理論 ほどけ／とけ

一 はじめに

本研究では、六世紀半ば、中国から朝鮮半島を経て伝来した仏教の経典にある「仏陀」（サンスクリット語 *buddha* の漢音訳）を、日本では音読（中国語読み）の「ブツダ」（呉音）だけでなく、なぜ早くから「ほとけ」と和語で訓読（日本語読み）していたのかを明らかにし、多神教的な原始信仰に代表される上代日本（倭国）の習俗が外来宗教である仏教を比較的穏やかに受け容れた理由のひとつに、「ほ・と・け」というひらがなの発音体感（上代日本の習俗としての言語的感性）が、「仏陀（覚者）」という宗教的概念に出会って仏教的パラダイム（日本的な習俗、あるいは日本文化の仏教化）をもたらしたことを主張する。

また、〈とく／とける、ほどく／ほどけ（る）、ゆるす／ゆるむ〉など「和語」（万葉仮名の系譜を今に伝える「ひらがな」）で表現される上代日本人の心性と、仏教的救済思想との関連についても意見を述べる。

発表者は、サンスクリット語「buddha」の漢音訳（音写）である「佛（仏）陀」を、日本では音読み（呉音）の「ブツダ」以外に、ひらがなで「ほとけ（仏）」と訓読した点に注目した。中国における「buddha」の音写には、「仏陀」以前にも「浮屠（フト）／浮図（フト）／仏図（フト）」などの用例があり、日本で「フト（フト）」がなまって「ほとけ」と転用されたという説もあるが、それだけでは和語である「ほとけ」の民俗学的な位置がいまひとつスッキリしない。この問題を論じた先行研究に検討を加えながら、自説を述べる。

筆者は、漢音訳された仏典と同じルート（インド・中国・朝鮮半島経由）で伝えられた漢字を仮借して、それまで「話しことば」であった上代日本語を万葉仮名で表記することに成功し、千五百年以上経ったいまも用いられている「ひらがな（カタカナ）」が、上代日本人の心性、いわゆる「やまとごころ」を今に継承しているという仮説を立てた。

つまり、万葉仮名がその後の変体仮名、江戸仮名（章体）という流れを経て、現在の「ひらがな」に受け継がれた上代日本語の発音体感（オノマトペ）、あるいは語義を分析することによって、本来「覚者」という意味を持たない「ほとけ」という和語を、なぜ漢語である「仏陀（buddha）」の訓読に用いたのか、その理由と背景について考察を試みる。

二 buddha の漢音訳「仏陀」、仏陀の訓読「ほとけ」

中国から朝鮮半島経由で伝えられた仏教（佛教）の佛（仏）という文字は、サンスクリット語の buddha（覚者、悟りを開いた者の意）を、インドから仏典を持ち帰った中国唐代の僧・玄奘三蔵が「佛陀（ブツダ）」と漢

音訳（音写）したものである。

日本では、中国における初期の音写、フト・ブド（浮図／浮屠／仏図）が日本へ入って「ふと」から「ほと」に慣用化し、これに「け」がついて一般化したとする説が有力である。つまり、「佛」の読み方には、「ブツ」という音読みだけでなく、「ほとけ」という訓読み（和訳）も加えて、ふたつ並行して用いるようになったという考え方である。

田ノ倉亮爾は論文「「ほとけ」という語について」⁽¹⁾において、広義におけるインド・サンスクリット語起源説として、次の九つを挙げている。

- ① 陀（ほと）＋迦耶（け・身）説
 - ② 「仏陀訶」の訛とする説
 - ③ 浮屠＋家（ケ）（教・道）の音読とする説
 - ④ 「浮屠」＋「木」（貴人の譬）…「ふとき」↓「ほとけ」（契沖『円珠菴記』）
 - ⑤ 「浮図」の古代朝鮮語（pulo）に接尾辞ケを附けた（『綜合日本佛教史』）
 - ⑥ 「浮図」＋「氣」（け）↓「ほとけ」
 - ⑦ 「浮図」＋「け」（物の怪のけ）↓「ほとけ」（崇る死霊）
 - ⑧ 「浮図」＋「け」（形を備えたもの）↓「ほとけ」（佛像）
 - ⑨ 「浮図」＋「け」（化・化身）↓「ほとけ」（佛陀の化身）（『日本佛教語辞典』）
- 同じように、純粹な日本語起源説として、次の七つを挙げている。
- ① 「ひときえ」（人消え）↓「ほとけ」（日本釈名）
 - ② 「ひとけ」（人氣）↓「ほとけ」（江戸時代の国語辞書『志不可起』）

- ③ 「ほどけ」(煩惱の呪縛を解き脱れた人) ↓ 「ほとけ」(『志不可起』)
 ④ 「ひとたまをぎむかへ」(人霊招迎) (日本語源学、林堯臣)
 ⑤ 「ほのか」(髣髴) (江戸時代の語源字典『言元梯』)
 ⑥ 「ほっておけ」(放却の義) (守屋が佛像を堀江に放却したのによる、龍谷大学・佛教辞典)
 ⑦ 「ほとほりけ」(煩気) 仏教伝来の折に疫病「ほとほりけ」が流行したので、仏教を誹って名づけたという。(『志不可起』、『正像末和讃』ほか)。

田ノ倉はまた、「ほどけ」という語(概念)は、仏教語の民俗化した結果ではなく、在来の民俗の中核が保持されたとする柳田國男の「死者を無差別に皆ホトケといふやうになったのは、本来はホトキという器物に食餌を入れて祭る霊といふことで、乃ち中世民間の盆の行事から始まったのでは無いかといふ考へも、さう突拍子もないものとは言へなくなると思ふ⁽²⁾」とする、いわゆるホトキ起源(柳田)説に対して、弟子の有賀喜左衛門が論文「ホトケという言葉について——日本仏教史の一側面——」⁽³⁾において疑問を呈し、ほとけの語が仏教初伝の直後から成立していたことを論証する三つの論点を紹介している。

第一の論点は、わが国で無上覚者の「仏」を初めて「ほとけ」と訓読した時期の考察である。その根拠の一つは、「日本書紀」推古二年(五九四)、もう一つは同じく「日本書紀」推古十二年(六〇四)の記事(「十七條憲法」)である。

「皇太子(ひつぎのみこ)及び大臣(おほおみ)に詔(みことのり)して、三寶(さむぼう)を興(おこ)し隆(さ

か)えしむ。是(こ)の時に諸臣連等(もろもろのおみむらじたち)、各(おのおの)君親(きみおや)の恩(みめぐみ)の爲(ため)に、競(きほ)ひて佛舎(ほとけのおほと)のを造る」〔日本書紀〕推古紀二年

「三寶(さむぼう)者(とは)仏法僧(ほとけのりほふし)也(なり)」〔十七條憲法第二條〕

また、仏足石歌と万葉集卷十六にも、仏教の正統的意味(覺者)の仏を指す歌がある。

「釋迦(さか)の御足跡(みあと)石(いは)に寫(うつ)し置き敬(うやま)ひて後(のち)の保止氣(ほとけ)に讓(ゆづ)り奉(まつ)らむ捧(ささ)げ申(まう)さむ (仏足石歌)

「佛(ほとけ)造(つく)る眞朱(まそほ)足(た)らずは水滄(みづたま)る池田(いけだ)の朝臣(あそ)が鼻(はな)の上(うへ)を穿(ほ)れ 〔万葉集〕卷十六、三八四一)

この二例ともに天平勝宝四年(七五二)の作と伝えられるが、これを先の「日本書紀」が編纂された飛鳥時代の推古紀(五九四〜六〇九)の延長線上で考えれば、「ほとけ」という語は奈良時代中期にはすでに成立していたことは明らかであると、有賀は述べている。

第二の論点は、死者を「ほとけ」と呼ぶようになった民俗学的経緯である。柳田は、死者が「ほとけ」と呼ばれたのは中世の盆の行器(ホトキ)であろうと想定したが、有賀は死体(個の死者)としての「ほとけ」から「あが氏のほとけ」(氏の先祖全体)という意味が成立するプロセスにおいて、推古一四年(六〇六)に国内全ての寺で七月一五日の盆(オガミ)をすべき詔勅が出されたことを挙げ、それが仏教と古くからの祖霊信仰(先祖供

養」との強い結びつきを示すものであるとして、その淵源は七世紀にさかのぼると推測した。

第三の論点は、「死者を無差別に皆ホトケというやうになったのは」というときの「ほとけ」の語の形成の事情である。とくに「死んだらみんな仏になる」と願うやうになったのは、平安末期から鎌倉時代にかけて、浄土宗（念仏往生）など一切衆生が無条件に救済されるという教えが説かれたとき、柳田のいわゆる「死者を無差別に皆ホトケという」土壤が用意されたと、有賀は判断したのである。

三 漢語の「訓読」は、渡来人の発明とする白川説

白川静は、漢字の「佛」について【旧字は佛に作り、弗（ふつ）声。〔説文〕八上に「見ること審（つまび）らかならざるなり」とあり、〔字林〕に「彷彿（はうふ）は相ひ似たるなり。佛は審らかならざるなり」という。「彷彿」は双声連語の形況の語。ほのかにして定まらぬさまをいう。〔詩、周頌、敬之〕に「時（こ）の仔肩（しけん…大任）を佛（たす）け、我が顯徳の行を示す」の佛は彌（ひつ）の仮借。字はのち仏陀の仏の字に用いる。仏陀は Buddha の音訳、覺者の意であるという。⁴】と解説している。

白川はまた、和語の「ほとけ」については【釈迦、またその像をいう。梵語 buddha の音訳。「ほと」がその音であるが、「け」をそえた意味が明らかでない。迦耶（かや…身の意）、また木・家・気などをあてて説がある。ト・ケは乙類。〔名義抄〕に「佛ホノカナリ、ホトケ、ヲホキニス、タスク」とみえる。〔記〕にはみえない字である。（中略）〔名義抄〕にそれらの諸訓を列する。のち殆ど仏教の仏の意に用いる。⁵】として、和語の

「ほとけ」を保止氣・保度介と表記した二例、漢語の佛・釋を「ほとけ」と訓読した三例を示している。（※既出の「仏足石歌」「推古紀二年」「万葉集三八四一」は重複するので割愛）

「法（のり）の源（もと）華（はな）咲きにたり今日（けふ）よりは保度介（ほとけ）のみ法（のり）榮（さか）え給（たま）はむ（東大寺要録）」

「汝（い）が姨嶋女（をばしまめ）、初めて出家（いへで）して、諸（もろもろ）の尼の導者（みちびき）として釋（ほとけ）の教（みのり）を修行（おこな）はしむ（推古紀十四年）」

上田正昭の研究^⑥によれば、紀元前三世紀ごろから、中国と朝鮮（半島）の間で戦いが頻発し、その都度、多くの亡命者（渡来人）が倭国を目指したという。紀元前二世紀、衛氏朝鮮の時代に中国から漢字が伝来したといわれるが、朝鮮半島から倭国への渡来（多くは亡命）は弥生時代以降、四回あった。最初の波が紀元前三世紀前後、二回目が五世紀前後、三回目が五世紀後半から六世紀初頭、四回目が七世紀半ばであった。

六世紀半ば（五三八年）、欽明天皇期に百済から倭国へ仏教が伝来した（公伝）とされる時期が、朝鮮半島への仏教伝来が四世紀後半であったことを考え合わせると、すでに漢籍に通じ、仏教文化に親しんでいた百済などからの渡来人である史部（ふひとべ）が「漢字の訓読」を推進した主力部隊であったと考えられる。

白川静は、梅原猛との対談で、漢字文化圏で訓読みをするのは日本人だけであり、ほかの国々では「漢音」のままで使う音読である、ただ、朝鮮半島の新羅の郷歌（歌謠）には仮名を振る、仮名を送るやり方があったと述べている。

また、百済では宣命式（自立語・語幹を大字で、付属語・活用語尾を小字で記す表記形式）の送り仮名があるが、それでも漢字は音読みで訓読みはない、三字、四字ぶつづけのイデオム（慣用句）として読んでしまうと思えた後で、和語の「訓読」は百済人の発明であるという仮説を立てている。

すなわち、四〇六世紀にかけて朝鮮半島からやってきた渡来人の中で、とくに史（ふひと）と呼ばれた人々は、中国語（漢語）で書かれた外交文書の閲読や返書の作成など文章の仕事一切を、まだ文字が使えない日本（倭国）人に代わって行っていた。漢語はもとより、やがて和語（倭語Ⅱ上代日本語）にも通じるようになった彼らは、漢語を日本語に適合する方法として、漢語を日本語で読む「訓読」を発明したというものである。

また、鶴久は「万葉集の用字法分類」を、①音読（字）、②訓読（字）、③音仮名、④訓仮名、⑤戯書の五つとしている。先に挙げた「ほとけ」「佛」の用例で考えると、まず、漢字の形と音を利用したもの、すなわち「ほとけ」を「保止氣・保度介」と書く（音仮名）が用いられ、次に漢字の訓読をもとにして固定した音を利用したもの、すなわち「佛（ほとけ）造（つく）る」「釋（ほとけ）の教（みのり）」など（訓仮名）が用いられたと考えることができよう。したがって、漢語である佛（仏）の〈訓読〉に、上代日本人の習俗が育んだ「ほとけ」という和語をあてたのは、漢語の理解はもとより和語のニュアンスにも通じた渡来人（史部）の功績であり、ベストマッチングであったということができる。

四 上代日本のホトケとカミ、その民俗学的位置づけ

柳田國男は「先祖の話」^⑨で、上代日本人は死者をホトケと呼んでいたと報告する。

また、このホトケは罪穢（つみけがれ）にまみれた存在であり、それを供養によって浄化するために行われた民俗行事に触れ、三十三年の法事（供養）を行うことで、初めて霊（死者の魂）が御神になるという信仰があったと報告している。たとえば、三十三年の法事がすむと、北九州のある島では、「人は神になる」という者があり、東北では位牌を川に流すという習わしがある。また、土佐では御子神（神社において親子関係にある神が祀られる場合、子に当たる神のこと）に奉仕する家の主人だけは、この三十三年の期間を六年または三年で神になることができる、などである。この期間が過ぎれば「喪の穢れ」は清められ、死者は神としてこれを祭ってもよいとする、古い信仰があったことが報告されている。

古来、わが国では三回忌、七回忌など供養が継続されている間、死者は「ホトケ」として扱われ、三十三回忌（弔い上げ。供養満了）をもって、個別の死者たる「ホトケ」は出自を同じくする祖霊（清められた先祖の霊）の一員として合祀されるようになったといわれる。

同じように、神道においても三十年祭（三十回目の式年祭。地方によっては五十年祭）をもって「祀り上げ」とされるが、これも「弔い上げ」とともに、上代日本の習俗を中世以降の民俗的な行事に引き継いだものである。しかし、氏族制度を奉ずる平安貴族や鎌倉時代以降の武家、地方豪族では、これらの年忌法要、あるいは式年祭が行われていたであろうが、一般庶民のレベルでは年忌法要を行う習慣はあまりなかったとも考えられる。

柳田は、また「私などの生れ在所（※兵庫県）では、正月十五日が神様の正月であつたが、一方にはまた翌日の十六日をもつて仏の正月とし、従つてその前の宵を仏の年越と呼ぶ処が関西の方には非常に多く、この方は実際に先祖棚に雑煮を供え、または初墓参りをしている」⁽⁹⁾ことや、越後の東蒲原郡ではこの十六日を後生始め（新年になって初めて仏をまつる日）と呼ぶことを紹介し、それは、仏の年越や後生始めのやり方があまりに仏教くさかつたため、正月松の内（元旦から十五日）が明けてからでないといふこの祭りをしなかつたと考察している。

これは、わが国の伝統的な習俗の仏教化プロセスにおける棲み分けの知恵であろうが、柳田はさらに言葉を継いで、仏教が説く死後の世界観との温度差について言及している。

ことに故人の霊を何の理由もなく、ホトケなどと呼んでいたのが悪かつたのである。いわゆる神葬式によつて祭りをしている家々でなくとも、死んで「ほとけ」などと呼ばれることを、迷惑に思つた者は昔から多いはずである。日本人の志としては、たとえ肉体は朽ちて跡なくなつてしまおうとも、なおこの国土との縁は絶たず、毎年日を定めて子孫の家と行き通ひ、幼い者のだんだん世に出て働く様子を見たいと思つていたろうのに、最後は成仏であり、出て来るのは心得ちがいでもあるかのごとく、しきりに遠い処へ送り付けようとする態度を僧たちが示したのは、あまりにも一つの民族の感情に反した話であつた。⁽¹⁰⁾

祖霊は屋敷内や近くの山などに祀られて（参り墓、詣で墓）、その子孫を守護し繁栄をもたらしものとして、ご先祖様、ほとけ様、あるいは神様として尊崇される存在となつていく。しかし、ご先祖様、神様の呼称は首肯できるとしても、なぜ祖霊は「ほとけ様」と尊称されるようになったのか、それを解く鍵は上代日本人の他界

観にあるのではないだろうか。

多神教（八百万の神）世界の日本人には、「天上他界」「地下他界」「山上（山中）他界」「海上（海中）他界」などの他界観がある。また、冥界に関しては「黄泉国（よもつくに）」「根之堅洲国（ねのかたすくに）」（『古事記』『日本書紀』『出雲風土記』）、あるいは「根国（ねのくに）」「底国（そのくに）」（神道の祝詞）があり、現世と冥界の間には「黄泉比良坂（よもつひらさか）」があること、また高天原（たかまがはら）に代表される天上他界には死穢のイメージはなく、火葬で生じる煙が舞い上がる様子がうかがえるが、地下（地中）他界は土葬のイメージがあるとして、他界観は葬送方法や風土にも関わっていると考えられてきた。

たとえば、丘眞奈美は、「山上（山中）他界と海上（海中）他界は、国土の七割が山岳地帯で囲まれている日本の国土から生まれた原始信仰と関わる。葬送を「野辺送り」「山送り」というが、山は古来より神が降臨する神域で死者の魂が向かう所とされてきた。」⁽¹²⁾と述べており、永松敦は、「柳田國男以後、山の神は祖霊信仰の中核をなす存在として語られ、死後の霊が山に登り山の神となり、それが、盆や正月、或いは、地域の人々の要求に応じて山と里とを往来するものと考えられてきたこと」に対して、「もう一つは、狩猟や焼畑などの生業に関わる神としての考え方である。前者（※柳田説の祖霊信仰）は、民俗学の定説となつている山が死霊の溜まり場となつて祖霊となり、それが山の神と昇華して霊場信仰を形成するというものである。後者（※永松説）は、近年、研究の進展を見た狩猟や焼畑といった稲作農耕以外の生業にまつわる神が水稻耕作にかかわる民俗神よりも早く発生したのではないかという考え方である。」⁽¹³⁾と述べている。

上代日本人にとってホトケ（死者）の供養とは、神道的な習俗としての「たましずめ（魂鎮め、呪鎮）」であり、その霊前で「子孫にまがごと（禍事）を起こさぬよう、はるか天上よりお見護りください」と祈る儀式で

あった。死後のある期間までは「ホトケ」として畏れられ（供養され）、祖霊や氏神となつてからは「カミ」、それは神（かみ）の概念というより天上・上座など尊称の上（カミ、ウヘ）として崇められるようになったのではないだろうか。

従来、ともすると直感や当て推量による解釈に流れやすい言霊研究と一線を画して、和語を一音節ごとの形態素子ととらえ、その二階層（組み合わせ）レベルである単語の意味をさぐる素語理論の研究者・野村玄良は、「素語一覽解説」⁽¹⁴⁾で、「神」＝「カ・固・堅・強固・威力」＋「ミ・身・実・実体（乙類）」で、「カミ」の原始の意味は「雷神・カミ」そのもので「強固な威力を持ち、これを示す実体」であらう、と述べている。上代日本人は、目に見えない幽身（かすか・み）、隱身（かくり・み）である「カミ」の存在を、闇を貫く稲妻の閃光、轟く雷鳴と落雷の響きなど、自然の脅威として感じていたのである。雷（カミナリ）とは神鳴り（カミナリ）、すなわち神（カミ）の音連れ（オトツレ）＝来訪の意である。

また、「上・カミ」は「ウヘ」ともいう。「ウヘ」は「ウ・〇形」＋「ヘ・辺・縁（ヘリ）」で、人体で一番高いところで湾曲「〇形」している頭の天辺（テッペン＝テンペン）であり、「その辺り」が「上・ウヘ」の表現であるところから、敬い仰ぎ見る存在をいう。

和語の「けがれ（氣枯れ・穢れ）」は、「正大の氣」が枯れた（不足した）状態を表すことばだが、いったん「けがれ」た身心を洗い清めるためには、「はらひ」〔祓ひ…ケガレをハレに転化する儀式〕と「みそぎ」（身削ぎ・禊ぎ…自らの罪を差し出して贖う儀式、精進潔斎）が必要となる。ここである「つみ（罪）」の原義は、まこと（眞・誠・全事・丸事）を「つつみかくす（包み隠す）」ことである。「清明心（せいめいしん）」の訓読みである「きよ（清）き・あか（明）き」心とは、自らの心こころのなか（中身）を「つつみかくさず（包み隠さず）」、たとえば太陽神である「お天道様（カミ）」の前ですべてさらけ出し、うそ偽りのない「まごころ（真心）」を示すことであるといわれている。

五 親鸞聖人の仏（フツ）、恵信尼の仏（ほとけ）

「三帖和讃」（正像末和讃）にあるように、親鸞は当時すでに人口に膾炙していた「ほとけ（ホトケ）」という呼称について、かなり苦々しく思っていたようだ。

善光寺の如来の／われらをあはれみまして／なにはのうらにきたります／御名をもしらぬ守屋にて
そのときほとをりけとまうしける／疫癘アるいはこのゆゑと／守屋がたぐひはみなともに／ほとほりけと
ぞまうしける

やすくすすめんためにとて／ほとけと守屋がまうすゆゑ／ときの外道みなともに／如来をほとけとさだめ
たり

この世の仏法のひとはみな／守屋がことばをもととして／ほとけとまうすをたのみにて／僧ぞ法師はいやしめり

弓削の守屋の大連（おほむらじ）／邪見きはまりなきゆゑに／よろずのものをすすめんと／やすくほとけと
まうしけり⁽¹⁵⁾

早島鏡正は、五首の大意を、およそ次のように要約⁽¹⁶⁾している。

六世紀半ば、わが国に仏教が伝来した欽明天皇の時代、異国の教えである仏教を巡って、排仏派の物部守屋が崇仏派の蘇我稲目と対立した。そのころ疫病が流行して、多くの使者が出たのは神の祟りだと考えた守屋

が、インドから中国を経て大坂（大阪）に着いた善光寺の如来（一光三尊仏の阿弥陀如来）に触ると大変熱を持っていた。そこで如来をそしって「ほとをりけ（※ほとりけ）（熱気）と呼んだ。その後の仏教徒たちも守屋の言葉に従い、仏を「ほとをりけ」、次いで「ほとけ」と呼ぶようになった。いまの世において僧侶を軽蔑する悪習も、つまるところ排仏派の守屋の邪険に由来するのである、と。

早島は、「したがって、聖人の著作を通して、仏は「ブチ」「ブツ」とよみ、「ホトケ」とはよんでおられません。」と書いているが、もとより漢籍に通じ、漢語（サンスクリット語の漢音訳）を大切にした親鸞は、「ホトケ」と呼ばなかった。和讃の送り仮名、注釈の左訓には、仏典（漢文）の書下しのように、平仮名ではなくすべて片仮名を用いている。

しかし、親鸞の妻・恵信尼が書いた手紙、「恵信尼消息」（親鸞の計報に接して、京都に住む末娘の覚信尼に宛てて書かれた手紙Ⅱ第三通）の中では、「佛（仏）」を「ほとけ」と訓読みしている。豪族の娘である恵信尼は、当時としては高い教養の持ち主だが、平仮名と変体仮名をまじえた手紙（消息）の文章では「ブツ」ではなく、もっぱら「ほとけ」と書いている。※カッコ内は、現代語訳の漢字、□は文字のかすれを判読したものである。

御たう（堂）のまへにとり井（鳥居）のやうなるに よこさまにわたりたるものに ほとけ（仏）をかけ
まゐらせて候か 一たい（体）ハ たゝほとけ（仏）の御かほ（顔）にてハわたらせ給はて たゝひかり
（光）のま（裏）中 ほとけ（仏）のつくわう（頭光）のやうにて まさしき御かたち（形）ハ みへさせ給
はす たゝひかり□（は）かりにてわたらせ給 いま一たい（体）ハ まさしき佛（ほとけ）の御かほ（顔）
にてわたらせ給候しかは これハなにほとけ（仏）にてわたらせ給そと申候へハ 人ハなに人ともおほえ
す あのひかりはかりにてわたらせ給は あれこそほうねん（法然）上人にてわたらせ給へ せいしほさ

つ（勢至菩薩）にてわたらせ給そかし（後略）⁽¹⁷⁾

「恵信尼文書」（西本願寺宝物庫から発見された原文の複製）から本稿に引用した二行目と三行目にある「ほとけ」の一字目（「ほ」）は、変体仮名の「本」の崩し字で「ほ」を表している。また、やはり六行目の文字は「佛」と書かれているが、前後の文脈と用例から考えて「ほとけ」という読みが妥当であろう。

もうひとつ注目すべきは、光の中に現れた一体の「佛（ほとけ）」の御かは（顔）は勢至菩薩の（生まれ変わり）法然上人である、そしてもう一体は観音菩薩の（生まれ変わり）善信の御房、すなわち親鸞聖人と言われ、驚いた途端に夢から覚めたというくだりである。

つまり、恵心尼は夢の中で、光に包まれた「ほとけ（佛）」の御顔（かは）に、法然上人や親鸞聖人の「面影」を見たのである。松岡正剛は「面影を追うことは実体を追うことより本質的なものにアプローチできるのではないか」と述べているが、柳田國男がフィールドワークで明らかにした「三十三回忌などの供養満了をもって⁽¹⁸⁾「ホトケ」は「カミ」として祀られる（神霊化）祖霊（亡き父母、祖父母）の面影を、白川静の辞書にも「釈迦、またその像をいう」とあるように、朝鮮半島からもたらされた仏像の温顔、慈眼に「生き写し（重ね合わせ）」て、偲んだのではないだろうか。

あるいは、柳田民俗学でいう「死者＝ホトケ」から、やがて天上（地上、山上、海上）他界から子孫を見守る「祖霊（守護者）」のイメージを仏教の「佛陀（漢語）」に重ね合わせて、「ほとけ（和語）」という呼び名を用いるようになったのではないだろうか。

また、それまで「カミ（神）」といえば、稲妻を光らせる雷鳴の轟きや、神域や神木の依り代など、目に見えない存在として「感じてきた」上代日本人にとって、仏教伝来とともに異国からもたらされた仏像の柔和な

表情やフォルムなどの具象性は、遙か遠い昔の記憶を呼び覚ます「新しい依り代」として、新鮮な驚きをもつて迎えられたに違いない。

六 「ほとけ」の身体的アプローチ、素語理論の分析

和語の淵源は、上古代日本人の口承文化を育んだオノマトペ（擬声語、擬態語）にある。それは、ひと言でいうと〈からだことば〉である。目に映る姿かたちや動きの様子、耳に届く風の音や鳥の鳴き声など、同じ土地で暮らし、同じ体格の人々がともにもつ生活感覚、あるいは暗黙知をことばとして共感する、それが〈からだことば〉である。

野口体操の創始者・野口三千三は、「無理な緊張を取り去る技術」の基本は、からだを「ゆるめる（弛・緩）ほぐす（解・放）」ということの実感をつかむことにあり、和語の「ほ」の身体感覚、「ほどき」の自動詞形である「ほどけ」に注目している。

「ほぐし」は「ほどき・ほぐし」と同じコトバである。「ほどき」はもともと「ほとき」と同音で、「ほ」の状態になるように解くことである。

和語の「ほ」は、漢字を利用していえば「火・炎・穂・呆・包・豊・放・惚」である。小さな穴・空いている所がいくつもあって、その全体が固まっていないものの全体のことである。「とき」は「解・溶・融・釈・説・時」である。「ほどき」の自動詞形は「ほどけ」で、もともとは「ほとけ」であったこの

「ほとけ」こそ、実は「仏（ほとけ）」の語源なのである。そこで私は「からだをほぐすことを手掛かりとして、仏とは何かを探り求める営みを体操という」と本気で考え、いろいろの動きを探り検している。¹⁹⁾

野口体操のアプローチは、「ほ」（身体感覚）＋「とけ」（動き）の体感によって「ほとけ」に迫ろうとするものであり、漢字の字母がいまに伝える響きをアトランダムに借りるとすれば、火融、呆時、包溶、豊釈（説）、放解もまた、「ほとけ」の営みのひとつである。

ところで、前引した田ノ倉亮爾の論文では、「ほと・け」の「け」の語源が未解決であるとされ、また白川静の辞書においても、「ほと」がその音であるが「け」をそえた意味が明らかでないと言われている。いずれも木・気・家・化（化身）・ケ（接尾辞）などを、「け」に当てはめて考察を試みたが、結局のところ納得できる説明には至らなかった。²⁰⁾

野村玄良は「ほと＋け」ではなく、「ほ＋と＋け」を一音節ごとの形態素子ととらえ、その二階層（組み合わせ）レベルである単語の意味をさぐる素語理論の研究を通じて、「ほ・と・け」を人体語（からだことは）の観点から解明しようとしている。

野村の「概念辞書」²¹⁾（素語の六分類）では、和語の基底的な一音節・素語（形態素子）を、その意味形態によって、①人体部位（身体部位）語、②人体動作（身体部位の行為）語、③人体物性（身体感覚）語、④人間関係（人間カテゴリー）語、⑤形状（視覚把握）語、⑥抽象（理知概念化）語という、六つのグループに類別している。

人体部位（頬の形態）語である「ホ」は〈膨らんで大きくなるもの・空洞・穂・帆・火・掘〉であり、人体動作（留保の形態）語である「ト（乙類）」は〈取る・採る・獲る・留める・止める〉であり、人体部位（毛の形

態)である「ケ(乙類)」は(眼に見えない・消え)であると説明されている。

この三つの形態素が示す和語「ホトケ」の語義について、野村に電子メールで直接問い合わせところ、次のような回答が寄せられた。上代日本における「ほとけ」のとらえ方を解明する重要な鍵となる資料である。私信メールであるが、許可を得てここに引用する。

「ほとけ」の語義分析の件。日本書紀に真仮名(万葉仮名)で文献記録されています。

「ほ」膨らみ張り詰めた形態 + 「と」留める形態(乙類) + 「け」消え(乙類) 故に、「活力ある人体の形態が消え去った状態であることを表す語」即ち「人体をかたどった偶像・仏像を意味すると同時に、活力を失った死体をも意味する意味構造」です。柳田國男説は舌足らずですが、正しいと考えます。明らかに「ほとけ」は伝統の日本語の「和語」であります。

先に、私見として①三十三回忌等の供養満了をもってホトケはカミとして祭られる祖霊(カミ)の面影を、朝鮮半島からもたらされた仏像の姿形に書き写して偲んだ、あるいは、②やがて天上世界から子孫を見守る存在となる祖霊(守護者)のイメージを仏教の「佛陀」に重ね合わせ、「ほとけ」という呼び名を用いるようになった、という仮説を提示した。

これは、先に田ノ倉亮爾、白川静らが未解決とした「ほと・け」の「け」の語源について、①「野口三千三の身体論(動作⇨自動詞の活用変化)」による「ほどき(ほどき) ↓ほどけ(ほとけ)」とする解釈、②野村玄良の人体部位(ホ)・人体動作(ト⇨乙類)・人体部位(ケ⇨乙類)の語義解釈による「人体をかたどった偶像・仏像を意味すると同時に、活力を失った死体をも意味する」とする解釈が、その答えの一つになると思う。

七 おわりに

宮田登は、論文「神と仏——民俗宗教の基本的な理解——」⁽²²⁾で、「古代のホトケの流れが、中世のホトケに及んでいる」という有賀の説明を引きながら、それでもなお柳田が中世のホトケからホトケへのプロセスに固執した理由を、次のように書いている。

この点を有賀はこう指摘している。それは、仏教によって変られた民間の風習や日本人の考え方によって日本文化の特質を知ることとはできない、と柳田國男が考えていたためではないかというのである。こうした視点に対して有賀の立場はどうかというと、「仏教が日本へ土着するためにどのように変わったかということを捉えることによって、日本文化の伝統を明らかにすることができると思う」⁽²³⁾というのであり、柳田と有賀の間には基本的理解の差があった。

仏教の日本化という課題は、仏教民俗の領域の主題でもある。この場合、仏教の特殊性と普遍性が、パラレルに民俗文化の中に発現しているのと見るのが妥当のように思われる。

本稿のはじめに、仏教の「仏陀（覚者）」という宗教的概念が、「ほとけ」という和語と遭遇したことによって、わが国に仏教的パラダイム（日本的な習俗、あるいは日本文化の仏教化）をもたらしたと述べた。これは、宮田がいうように「仏教の特殊性と普遍性」が、上古代日本の伝統的かつ原始宗教的なカミ信仰（習俗）との間に葛藤（崇仏派の蘇我氏と排仏派の物部氏の抗争など）を持ちながらも、やがてカミ（神）とホトケ（仏）とい

う二つの概念が、日本の民俗文化（民俗信仰）の中にパラレルに発現したと考えることができる。

しかし、先に示したように、本来、和語の「ほとけ」には「覚者」という意味はない。それなのに、なぜ「仏（仏陀）」に「ほとけ」という訓読みを当てたのか。筆者は、和語「ほどく／ほどける」、「とく／とける」の語義に、それを説明する手がかりがあると考えた。

まず、「ほどき」の自動詞形「ほどけ」が「ほとけ（解け）」の語源であると考えた野口の身体論は、あらゆる束縛からの「ほどけ（解け）」が、肉体の滅失（死後の解放＝体失往生）だけでなく、たとえば野口体操などで身心を「ゆるす／ゆるむ」ことによって、この生き身、丸ごとの「ほどけ（身心の解放＝体失往生）」を得ることができる。つまり、永遠の「ほどけ」を追い求めるのではなく、一瞬一瞬の「ほどけ」を大切にして、そのひとつつらなりを体感して生きる（からだことば）を「仏」に重ねたものである。

他動詞の「とく／ほどく、ゆるす／ゆるめる」には、固く縛った靴の紐を自力で解（と）く・解（ほど）く、自分の意思で相手を許（ゆる）す、からだを緩（ゆる）める努力のニュアンスがある。これに対して、自動詞の「とける／ほどけ（る）／ゆるむ」には、靴の紐が自然に解（ほど）けてしまった、気がついたらからだは緩（ゆる）んでいたなど、無意識（他力）のイメージがある。自力で心身の自縄自縛を「ほど（解）く」のか、あるいは自力を頼む執着を「はな（放）ち、自然に「ほどけ（解）る」はからいに任せるのかの違いである。同じように、自分の意志や努力で「ゆるす（許す、赦す）・ゆるめる（弛める、緩める）」と、自然に（無理なく）「ゆるむ（弛む、緩む）↓ゆるんだ」では大きく異なっている。

もうひとつ、野口は「ほどく／ほどける」から派生したといわれる「とく／とける」について、「とき」に

「解・溶・融・釈・説・時」の漢字を当てている。また、泉原省二は、「とく」には【かたく強張ったものを、ふわつと「ほぐす・やわらげる・やさしくする」、「硬く張りつめていた心が、柔らかく、和らぐ」などの働きがある】²⁴⁾として、「とく／とける」「ほどく／ほどける」の用例を挙げている。

解(と) く…難(かた) く難しい問題の答えを見つける。／溶(と) く…固(かた) く固まっていたものが水になじむ。／説(と) く…理解し難(がた) い考えをわかりやすくする。／梳(す) く…硬(かた) く強張った髪に空気を入れて柔らかくする。／熔(と) ／鎔(と) ／融(と) ＋ける…金属などが扱いやすくなる。／ほどく…解(ほど) く／ほどける…解(ほど) ける

たとえば、「からだことば」の「とける」を「溶ける」と用いれば、みんな同じ五つの化学文字(A、G、T、C、Uの塩基配列)で書かれた「現し世のからだ(物質)」、つまり「星のかけら」(生きとし生けるもの、ありとしあらゆるものの基本的な構成物質)に溶融するカミの〈いのち〉、あるいは時空を超えて遍在するカミの〈いのち〉と観じた上古代日本人の心性は、仏教が説く「山川草木国土悉皆成仏(悉有仏性)」という世界観を、既知のもの(意識下の暗黙知)として素直に受け入れることができたはずである。

これらのことから、六世紀以降、日本文化(習俗)の仏教化が比較的スムーズに受容された理由のひとつに、和語「ほどく／ほどける」、「とく／とける」の源流をかたちづくった〈からだことば〉、すなわち「ひらがな」の土壌(精神文化)を挙げることができる

筆者は、十数年前から「ため息健康法」²⁵⁾を提唱している。これは意識して「つ(吐)く」ため息ではなく、思わず(無意識に)「出る」(洩れる)ため息のエクササイズである。このため息こそが、身心ともに「息(生き)

詰まった」ととき、最後に残された「息（生き）抜く」知恵であり、悲しみや苦しさで内側に閉ざされた（内転屈曲、拒否の姿勢）からだを、楽しく嬉しい（外展伸張、受容の姿勢）からだに拓く無意識の身体技法であると考えている。

どのように深い悲しみやつらい苦しみであっても、それを乗り越えようとがんばる肩の力を抜き、大きなため息をつけば、身体の深奥からゆるみ広がる、内なる心が解き放たれる。

「ふっとため息、ほっとひと息」ということばがある。ふっとつくとため息で「からだ」がゆるみ（緩み）、ほっとつくひと息で「こころ」がほどける（解ける）ので、身心ともに「ごく（極）らく（楽）」になる。つまり、自力では得られない他力の〈はたらき〉を体感する「ほどけ」のエクササイズが、「ため息健康法」のキーコンセプトである。

今回、本稿では触れなかったが、〈からだことば〉である「とく」「ほどく」「ゆるす」「すくふ」などの和語たちが、親鸞の『三帖和讃』、あるいは道元の『正法眼蔵』で用いられた仏教用語（中国語）の解説を、上代・中古における日本人の心性に寄り添いながら、どのような文脈でサポートしていたのかについて、さらに研究を深めていきたい。

註

- (1) 田ノ倉亮爾「ほとけ」という語について」(『武蔵野女子大学仏教文化研究所紀要』八号)、一九九〇年、八〇―一一頁
- (2) 柳田國男『柳田國男全集13』筑摩書房、一九九〇年、一一九頁
- (3) 有賀喜左衛門「一つの日本文化論」未來社、五頁以下
- (4) 白川静『字通』平凡社、一九九六年、七五四頁
- (5) 白川静『字訓』平凡社、一九九五年、六七九頁
- (6) 上田正明『東アジアと海上の道』角川学芸出版、一九九九年、二九―三一頁
- (7) 白川静・梅原猛『呪の思想』平凡社、二〇一一年、六八頁
- (8) 鶴久・森山隆編『万葉集辞典』桜楓社、一九七七年、二二〇―二三五頁
- (9) 柳田國男『柳田國男全集13』筑摩書房、一九九〇年、一三二頁
- (10) 柳田國男『柳田國男全集13』筑摩書房、一九九〇年、七〇頁
- (11) 柳田國男『柳田國男全集13』筑摩書房、一九九〇年、七一頁
- (12) 丘真奈美『京都奇才物語』PHP研究所、二〇一三年、一四四―一四五頁
- (13) 永松敦「山の神信仰の系譜」(宮崎公立大学人文学部紀要) 第一二卷第一号、二〇〇五年、二〇五―二〇六頁
- (14) 野村玄良『日本語の意味の構造』文芸社、二〇〇一年、六三―六四頁
- (15) 親鸞『正像末和讃 善光寺讃』西本願寺版「浄土真宗聖典・注釈版」、一九八八年、六二〇頁
- (16) 早島鏡正『正像末和讃 親鸞の宗教詩』春秋社、一九七一年、二一九頁
- (17) 恵信尼『十通の手紙(恵信尼文書)』えしんの里観光公社、(第三通、原文と現代語訳)
- (18) 松岡正剛『神仏たちの秘密 日本の面影の源流を解く』春秋社、二〇〇八年、五五―五六頁
- (19) 野口三千三『野口体操 おもさに負く』春秋社、二〇〇二年、八三―八四頁
- (20) 田ノ倉亮爾「ほとけ」という語について」(『武蔵野女子大学仏教文化研究所紀要』八号)、一九九〇年、一八―一九頁
- (21) 野村玄良『概念辞書』素語の六分類

(URL = <http://gainen.hatenablog.com/entry/2015/04/21/015719>)、二〇一五年

- (22) 宮田登『日本民俗文化体系』4 「神と仏」民俗宗教の諸相、小学館、一九九四年、一八頁
- (23) 有賀喜左衛門『二つの日本文化論』未来社、九八頁
- (24) 泉原省二『「とく／ほとく」の意義素』日本語教師（泉原省二のウェブサイト URL = http://blog.livedoor.jp/s_izuhara/archives/3530704.html）'二〇一一年
- (25) 原山建郎『身心やわらか健康法』光文社、二〇〇二年、二九～三四頁

（武蔵野大学仏教文化研究所研究員（専門）和語でとらえる仏教的身体論）